

子ども・子育て支援研究センターで活用する フレーベルの「遊戯」と「教育遊具（教具）」についての考察 —その体系性を考慮して—

小笠原 道 雄*

A Study on the Utilization of Fröbel's "Play" and "Teaching Tools" in Children
and Child-Rearing Support Centers : In Consideration of Their Systematic Relations

Michio OGASAWARA

Fr. Fröbel has been called "the Father of Kindergarten" because he founded a kindergarten in Germany in 1840 as the first one all over the world. Before the foundation, however, he invented "teaching tools" with which children and their mothers or care-givers would play together, in inquiring into principles of human education for fostering children's autonomy. He continued to invent "teaching tools" up to his later life in explicating the principles theoretically and practically. In other words, he invented educational materials, that is, "teaching tools" to use in a kindergarten as a "place" for care-giving before its foundation, and considered that the utilization of the tools at home, in kindergarten or in school would make possible human education that fosters freedom and independence. Why did he find significance in "play" and invent "teaching tools" that rely on no letter? This study answers the question in considering the systematic relations of his "teaching tools" and provides examples of utilizing the tools in children and child-rearing support.

キーワード：Fr.フレーベル、教育遊具、遊び、幼稚園、子ども・子育て支援研究センター

Keywords : Fr.Fröbel, teaching tool, Play, kindergarten, Children and Child-Rearing
Support Research Center

はじめに

遊びこそは人を強化する優れた精神的沐浴であったと
今でも私はそれを強く感じるのです。

(Fr.フレーベル著『自伝』より)

教育にとって第一に問題なのは、子どもの人間形成に
ふさわしい素材を与えることでなければならない。

(J.プリューファ著『フレーベル』より)

Fr.フレーベル (Fröbel, 1782-1852) は、1840年、
ドイツに世界で最初の『幼稚園』(Kindergarten
= 子どもの庭) を創設したことで「幼稚園の父」
と流布されてきた。実は、フレーベルはその幼稚園
の創設に先立ち、家庭や保育所・幼稚園で乳幼
児と母親・保育者が共に遊び、育む「教育遊具 (教
具)」(以下、「教具」と表記) を一部考案し、子
どもの自主性を育む人間教育の原則を探求し、そ

* 広島文化学園大学 学芸学部 子ども学科
Hiroshima Bunka Gakuen University Faculty of Arts and Sciences Department of Childhood Studies

れを理論的にも、実践的にも解明し、晩年にいたるまで教具を考案し続けたのである。つまり、フレーベルは、幼稚園という教育（保育）的「場」（空間）の創設以前からその空間で使用する教材、つまり、「教具」を考案し、それを、家庭、幼稚園で活用させることによって初めて自立的で、自由な人間教育が可能になると考えた。このような独創的な取り組みは、19世紀の母国ドイツだけではなく、以後、全世界の幼児教育に大きな影響力を与えてきた。なぜ、フレーベルは「遊戯」を家庭や幼稚園教育の基本にしようとしたのか。なぜ、文字によらない「教具」による人間教育を考えたのか。以下、本論では、フレーベル教育遊具のもつその体系性、つまり、その全体像からこの問題を考察し、併せて、具体的に、家庭や幼稚園で活用する『教具』について最近収集した諸資料をもとに考察し、その方法を説明し、具体的に、子ども・子育て研究センターで活用する『遊具』の事例を提示したい。

1. フレーベルの遊戯論（本稿での「遊び」とか「遊戯」の言語（ドイツ語）はシュピール（Spiel）

で、表記は必ずしも統一されていない）：

子どもの遊びを発見し、それを体系化したと言われるフレーベルの遊戯論は、一般に、ロマン主義思想、すなわち、感情、個性、自由等を尊重し、自然との一体感や無限なものへの憧れの具体的展開として特徴づけられるが、その展開は、フレーベルの思想と実践の発展につれて次第に深化した。以下、概略的にフレーベルの生涯に即して、その遊戯論の展開を見ることにしよう。

1) 活動力、自己活動としての「遊び」

（1）遊びに関する思考の端緒と帰結：フレーベルが教育上、遊びの重要性を認識したのは、スイス、イヴェルドン（フランス語でYverdon：ドイツ語でIfelten）のペスタロッチー（J. H. Pestalozzi, 1746-1827）のもとに滞在（1808-10）していた時であると言われる。フレーベルはその『自伝』の中で「（ここで）私はまた子どもの遊び、精神と情操と身体を発達させ、強化する大きな力にみなぎった子どもたちの戸外での遊びの有する共通性をも習得しました」と述べている。その際フレーベルは、遊びの中に、特に「力の展開の要求」、つまり「精神と心情と身体とを

発達させ強くする力」を見ていた。同時に、「力の展開」を超え、最近解説された資料では「遊び」を「道徳力の根源」として把握していたことも明らかにになっている。具体的には、「遊び」を通じて子どもは、「遊び」の持つ「ルール」や「法則性」を予感するというのである。

（2）主著『人間の教育（Menschenziehung）』

（1826）の遊戯論：遊びに関するフレーベルの見解については、その全体像を示している訳ではないが、最初の展開した段階を示したのは主著『人間の教育』においてである。そこでの特徴は、子どもの発達段階に即して、遊びを考察していることである。フレーベルは、子どもの生命の発達を乳児期、幼児期、少年期等、いわゆる子どものそれぞれの発達相を質的に異なるものととらえ、各時期を「内と外」との関係において把握している。結論的には、a.身体的な、あるいは聴覚を練習したり、色彩遊びのような視覚を訓練する遊び、b.感覚的な遊びや、思考や判断を要する遊び、c.知的な遊びのいずれかである、としている。

2) 象徴としての遊び：

（1）ペスタロッチーの影響やフレーベル自身の思想の深化から、遊びを主観的な側面から解釈していたのに対して、以後、遊びの象徴的意味が登場してくる。1830年（刊行1833）の『人間教育の概要（Grundzüge der Menschenziehung）』では、自然界の運行（運動）と人間の遊び（運動力）、さらには生活（経験）の「祭り（Feier）」が共に象徴的なものとして把握されている。例えば、子どもがスケートによって、氷の上を一直線に滑る外的な運動は、そのまま子どもが個々の人生の目標を見つめそれに向かって一直線に努力するという人生の深い一般的な本質的特徴を示すことになる。つまり、このスケート遊びにおいて経験されるものは、人生の目標追求であり、同時にそれは、目標追求の原体験なのである。

（2）「恩物（Gabe）」の遊戯論：1838年を一つの境としてフレーベルの遊戯論はさらに展開する。それは、1837年にブランケンブルクに「幼児期と青少年期の作業衝動を育成するための施設」を開設し、具体的に、遊具の制作と販売に取り組み、更に、翌年、その遊具の普及を図るため『日曜誌（Sonntagsblatt）』を刊行した時期である。

その『日曜誌』のモットーとして、J.Ch.シラー (Schiller, 1759-1805) の「テクラー、まぼろしの声」の詩から「無邪気な遊びにさえ、しばしば高貴な意味がある」の一節が引用される。シラーの『人間の美的教育についての書簡 (Ueber die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Brief, 1793-95)』は、フレーベルの遊戲論に大きな影響を与えた。当然、フレーベルは、同時代の遊戲論、例えば、J.ホイジンガー (Heusinger, 1768-1837) の著作を厳密に研究した。また、多くの遊具を発見したB.Hブラッシュ (Blasche, 1766-1832) と、フレーベルは盛んに手紙のやり取りをしている。

3) 遊具と遊戲論の合一：

(1) 一般にフレーベルにおける遊びの思想の展開には、遊具がすでに構想されていた理論の応用から生じたものではなく、逆に、理論は遊具を実際に使用してゆく実践の中で一步一步発展していることがわかる。その具体的な現れであり、フレーベルの遊戲論の集大成でもあると共に当時ヨーロッパにおける最高傑作の育児書と考えられるのが、フレーベル晩年の家庭育児書『母の歌と愛撫の歌 (Mutter = und Koselieder)』(1844)である。

(2) 『母の歌と愛撫の歌』の遊戲論：母親（保母を含む）のために書かれた本書の表紙には、「幼児期の生活を早くから心を合わせて育てるための身体と四肢および感覚の遊び歌」という副題を付し、下段には、上記シラーの一節が記されている。本書の詳細なタイトルは、以下のようなものであるが、ここにはすでに本書の精神の基本線を私たちに予感させる。すなわち、「さあ、子どもたちに生きようではないか！母の歌と愛撫の歌、および身体と四肢と感覚の遊戲のための歌。子どもの生活の早期保護と自己保護のために。フリードリヒ・フレーベルによる家庭育児書」。フレーベル自身、本書の精神（課題）を『母の歌と愛撫の歌』への「指示」の中で以下のように示している。「私はこの書の中に、私の教育法の最も重要なものを示した。それは自然に即した教育のための出発点である。なぜならそれは、人間の素質の萌芽が健全に、そして完全に発達すべき場合には、いかに育てられ、支えられなければならないかという方法を示しているからである」(J.プリューファー

の「あとがき」「この本を生みだした精神」から)。又、同様の課題を叔母のM.シュミット宛の書簡の中でも述べている。「子どもの身体、四肢および感覚活動の使用を助けるのみではなく、後になってそれらを十全に意識するのを助け、さらには母親やその代理人をして、こうした子どもの保育やその高次の意義や究極的関連を意識させるために、私は生活そのものから現れてきた少しのかわいらし詩と遊戲をすべての幼児の身体、四肢及び感覚遊戲の子守歌 (Koselieder) と名づけて、心にとめました」。その過程はいつでも「事物から像へ、像から象徴へ、象徴から事物の本質を精神全体として把握することへ、という道であり、こうして理念は発展するものなのです」(「指示」より)。いずれにせよ、本書は、「絵」(絵画)、「詩」(言葉)、「歌」(曲)の三位一体からなる当時考えられる最高の「育児書」で、ヨーロッパにおける育児書の原型をなしたものと考えられるが、残念なことに、20世紀に入り、例えば、J.プリューファ版 (1911年版；この版が最も広く普及したのであるが) では、付録として添付されていたR.コールの原譜が削除されてしまうのである。

2. フレーベルの『遊具』論：

1832年のフレーベルの日記からは、遊具が今なぜ特別に彼の関心を惹くかについてより明確な説明を私たちに与えてくれる。そこでは「精神的なものの表出」は「身体的空間的なもの」に結びつかねばならない、という『人間の教育』において論述された思想に依拠しながら、精神が、自己表出(表現)を通じて自己認識へと高まるためには、必然的に「素材」、分かりやすくいえば「教材」を必要とする、ということである。それ故に、フレーベルは「教育にとって第一のものは、子どもである人間に、形成のための適切な素材を与えることでなければならない」と断言するのである。フレーベルによれば、「自己表示」は、子どもの発達の初期の段階における「遊戲」のなかでおこなわれる。そこから、フレーベルは「遊戲の活動」の本質の解明とともに、その「遊戲」を導き、活性化する「教具」の具体的考案を開始するのである。

1) 遊具の理論：フレーベルは、遊戲に関する考察において、最も小さな子どものなかにも、すで

に活動への「本能（活動衝動）」が生まれている、ということから出発する。子どもは、自分の環境への興味を示し、大人の生活に参加しようとし、大人のように行動したりしようとする。なぜなら、遊戯は、「外的世界への鍵」であり、同時に、「内的世界の覚醒に最も適した手段」だからである。幼児期、つまり「芽生えの時期」に人間発達の道全体の「源泉」が存しているからである。この遊戯によって保育するという風景の中で、「遊具」という手段を発見する端緒は、1834年、フレーベルがスイスのブルクドルフの孤児院で遊んでいる子どもの観察を通じてである。遊んでいる子どもが、小さな棒と木材でできるさまざまな形について考え、それを体系化し初めているのである。その様子をフレーベルは印象深く同僚で後にその後継者になるJ.A.バーロップ（Barop, 1802-78）に報告している。「私は今、毎日一時間かあるいは数時間、非常にまれな素質をもっているように思える六歳から七歳くらいのイタリア人の子どもと関わり合っています。この子どもは、よく私に直角二等辺三角形を作って見せてくれます。注目に値するのは、彼がこの場合、常に一定の関係にある様々な形を好んでいるということです。彼はまた好んで中央から作り始めます。そうでない時には、彼は、特定の対象、例えば、家、塔、机、記念碑、教会などを好んで作っています。——建築用の石材やさいころの積み木が最初の遊具であり、また最初の遊具であり続けます」（Fritz Halfter; Friedrich Fröbel: Der Werdegang eines Menschheitserziehers. 1931, s.724ff.）

2) 遊具の基礎づけ：1837年1月、フレーベルはバート・ブランケンブルクに移住後、ただちに、最初の六つの「恩物（Gabe）」の制作を依頼することが出来た。この最初の六つの「恩物」とは、ボール、球と立方体、様々な分割された立方体（「第三から第六恩物」）、そして床板、棒切れ、折り曲げ、切り取り、組み合わせるための紙である。（第一恩物、すなわちボール（6色の毛糸から出来ている小さな球）は、すでに、1836年夏に提案している）。以後フレーベルは、彼の人生が終わる1852年まで、「遊戯ないしその作業手段（教具）」について考察し、その連関を基礎付けようと試みた。特に、1851年の「第三恩物のための付録」の「あとがき」では、幼稚園教師の教授的機能が強調さ

れているのである。「子どもたちの一人が何か特に本来的なものを（略）作りたいなら、彼にはすべてを教えてもよいのである。（略）徐々に、子どもたちの一人一人に、構造のための手本を手渡してもよいのである」。ここには、「遊具」を使って、遊具の『構造』を「提示する」、「教える」という、19世紀後半から支配的になる、幼稚園の学校化の端緒がみられる。同時に、それは「遊具」が狭く「教具」化する方向でもあり、併せて、それは幼稚園教師の専門職化への道でもあった。晩年のフレーベルが「保母」養成へ最大の関心を示し、尽力した背景には、「遊具」の基礎づけにはじまり、その教授学上の専門家の養成の必要性を認識したからである。

3. 子ども・子育て支援研究センターで活用する フレーベルの「教育遊具」

ここで先ず、今日までに解明されている諸資料の解読によって、「フレーベル教育遊具の体系」に関する論者の「試案」を文末に図1で示す。（明治9（1876）年、日本で最初の「幼稚園」である東京女子師範学校（お茶の水女子大の前身）附属幼稚園にアメリカ経由で日本に輸入された『遊具（恩物）』は、1990年代まで誤って20遊具（恩物）等の名称で紹介され、使用されてきた。従って、ここに示す「教育遊具の体系」とは異なる点に注意していただきたい。従来の「誤まった受容」の根源には、フレーベルの教育遊具が「恩物」と「作業具」から構成されているにも関わらず、両者を同一の「恩物」としてしまった点に起因する。その背景としては、子どもの発達段階を全く考慮せず、従って、家庭や幼稚園、学校での教育遊具を区別することなく、しかも集団的に「一斉教授」の方法で提示（教授）したことにある。）

1) フレーベル「教育遊具」の体系化；

先のフレーベルの遊戯論や教具論の考察から、フレーベルの「教育遊具の体系」は、大きくⅠ．家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』（1844）、Ⅱ．遊具手段としての狭い意味での「遊具」、Ⅲ．運動遊戯の三部から構成されることが判明する。その際、フレーベルの遊戯が、時計文字Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの順序で考案されたのではなく、Ⅱの遊具手段としての『遊具』を端緒に、スイス時代からのⅢ．運動遊具、そして晩年のⅠ．家庭育児書『母の歌と

愛撫の歌』の順序で着手され展開された。しかし、全時期を通じて、Ⅱ、Ⅲは常に、吟味され、考案されてきたのである。

さて、ここで具体的に、子ども・子育て支援研究センター等の空間（施設）で活用できる「遊具」は、図1のⅡ、「対象となる遊戯手段」が中心となる。

その遊具の特徴は、第一に、子どもの成長・発達を考慮して考案されており、具体的には、(1) 家庭における「教育遊具」、(2) キンダーガルテン（幼稚園）における「教育遊具」、(3) 媒介学校（キンダー・シュレー）における「教育遊具」、そして、(4) 基礎学校（小学校4年迄）における「教育遊具」に区分され展開されている。

特徴の第二は、フレーベル教具は、基本的な形式（形）を保持している。すなわち、a. 立体、b. 平面、c. 直線、d. 点の四つの基本的な『形』である。しかもそれぞれに、「生活の形式」、「美的な形式」、「認識の形式」を考えているのである。

第三の特徴は、上記の基本的な形式から、単純な形（球体など）から多様な形への展開の仕方として、図左側の「分割的」（分析過程）と図右側の「構成的」（総合過程）を導入し、「遊具」の全体が構想されていることである。方法論として、すべての教育遊具は、まず立体を使い、それから平面、線、点へと進み、その後再び、立体の遊具へと回帰しよう構成されている。この具体的な現象として、幼児が遊具を見ると、先ず、バラバラに壊し（分解し）、次に、それをまとめ、積み上げる（総合、構成すること）からもよくわかる事柄である。本論体系図の左側が分割的（分析）過程であり、右側が構成的（総合）過程で、それぞれが矢印で循環（回帰）するよう示されている。遊具に接する幼児、児童の発達段階に応じて、子どもの関心が遊具の種類と同時に、「分割的」と「構成的」の動的両場面があることに保育者は注意する必要がある。

2) 子ども・子育て支援研究センターで活用する遊具の実例とその解説（本稿では、ドイツ、バート・ブランケンブルクのフレーベル幼稚園での実践を、園長のM.ロックシュタイン女史の近著『幼稚園（Kindergarten）』（2004）のなかの写真等を引用して説明する。なお、原著は、近々に日本語版翻訳書として刊行される予定である。）

a. 立体の遊具

(1) 第一恩物 ボール：本来は家庭の遊具であるが、センター内でも親子が共に活用できる遊具である。フレーベルが考案したボールは直径4cm、毛糸あるいは布地で作られ、虹に似せた6色のボールから成る。ボールは木箱に収められており、木箱には三本の棒がつけられ、ボールをつり下げる枠、ブランコの支えとして使用する。フレーベルはボールを用いた遊びとして30種類程提案している。その利用方法の具体的例の図と共に掲載する（図2-1、2-2）。

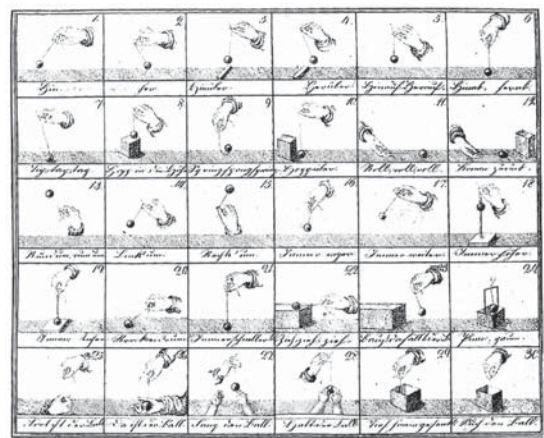


図2-1 第一恩物の指導例

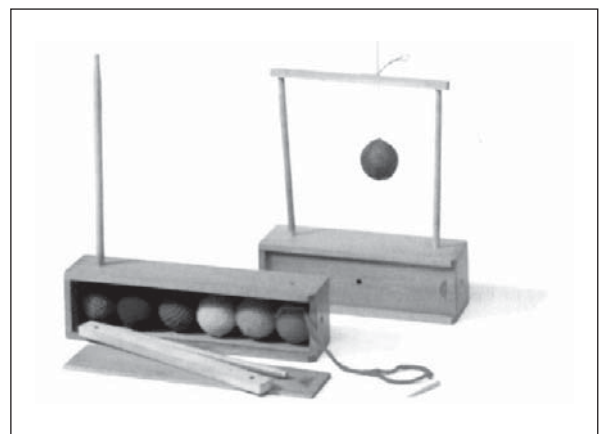


図2-2 第一恩物 ボール

(2) 第二の遊具は木製の球と立方体、そして円柱、この三つの立体セットである。本来この遊具も家庭で幼児と母親が共に使用するものである。最初、第二遊具は、球と立方体であったが、1843年、円柱を加える。本体は、縦・横・高さともに4cm、紐でつるすための留め金がついている。立方体がその角、辺、面それぞれの軸を中心にして

回転すると、その都度3つの異なった形が見える。つまり、二つの円錐が底面で合わさった形、平たい二重の球体、それに円柱である。この円柱も回転させると3つの形を示す。つまり、つなぎ併せた円錐、球体、そして円柱そのものの形である。この第二遊具は、フレーベルの遊具に通底する基本要素の特色を示している。同時に、第二遊具は、遊びを通じて物の形の単純さと複雑さを見て取ることができる。換言すれば、第二恩物の遊戯を通じて「静」と「動」が、一目瞭然になるのである。このような物体のありようを、フレーベルは「規準の形」と呼んでいる（図2-3）。

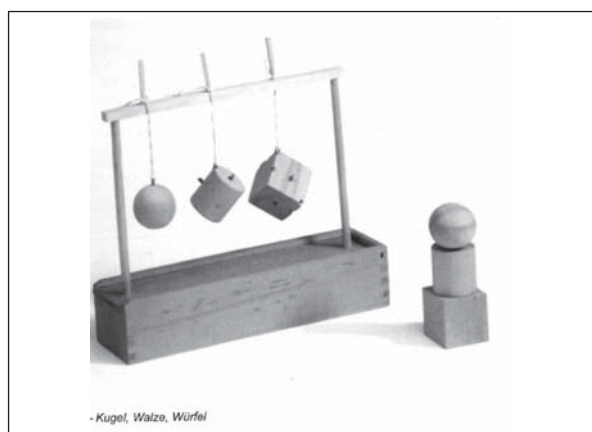


図2-3 第二恩物

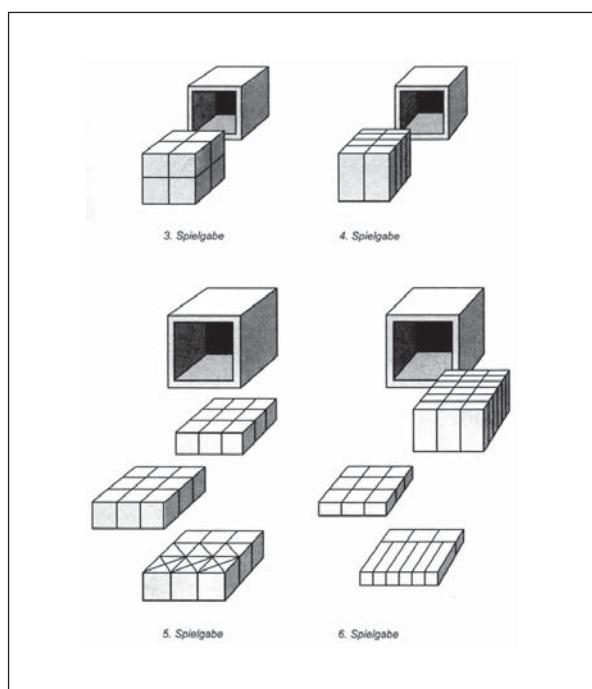


図2-4 第三、第四、第五、第六恩物

第三遊具から第六遊具は、基本的に、幼稚園で使用される遊具である。いずれも、立方体が様々な分割されることによって構成されている。分割のしかたに応じて、立方体は直方体（レンガ状の形）にも、縦に長く切られた直方体にも、横に区切られた直方体にも、また角柱にもなる。

第三遊具は一辺が2.5cmの立方体8つを積み重ねたものである。とりわけ、第三遊具は、それぞれの立方体が組み合わされて大きな立方体をなしていることがわかる。フレーベルが考案した全ての「恩物」「作業具」が作り出す「形」は、＜人を取りまく世界＞・＜美しさを感じさせる基本形＞・＜世界を構成する基本図形＞を感得する手助けとなる。第三遊具によって構成される形について、フレーベルは何度も考え直している。そうしてフレーベルは第三遊具によってできる形の一覧表を作成し、100種類もの＜人を取りまく世界＞を紹介している。その＜人を取りまく世界＞とは、子どもの日常生活や、子どものまわりある事物（例えば、椅子や花、家、教会＞のことである。

＜美しさを感じさせる基本形＞、あるいは＜飾りの形＞は、立方体を回転させて、中心や内部の部分を観察すると見えてくる。具体的に、フレーベルは71種類の＜美しさを感じさせる基本形＞を一覧表にしている。ここからは、フレーベルの言う「内と外」の作用の関係が判明する。

＜世界を構成する基本図形＞を用いて、フレーベルは子どもたちに数学的な知識ならびに部分と全体の関係を感じ得させようとしている。

第五遊具は第三遊具をより大きな立方体の箱に収められ、いわば第三遊具の拡大版である。一辺7.5cmの立方体は、どの辺もそれぞれ3分割される。この立方体は27個の立方体の集合で成り立っている。そのうち3分の1（9個の立方体）は一つの対角線で分断され、残り3分の2（18個の立方体）は二つの対角線で分断されている。その結果、大小さまざまな角柱の＜屋根の形＞を提供できる。個どもたちは、この＜屋根の形＞を使って、様々な遊びができる。48の石版画を収めた小冊子は、＜人を取りまく世界＞・＜美しさを感じさせる基本形＞・＜世界を構成する基本形＞を形成するヒントを含んでいる。

第四遊具は、一見したところ第三遊具と同じ大きさの箱に収められているが、その箱の中には縦

5cm、横2.5cm、高さ1.25cmの直方体という、それまでの遊具にはない新たな形が8個入っている。フレーベルはここで、正方形の長さを基準として、遊具を形作ろうとしている。このようにして、第三遊具から第六遊具までが作られる。第四遊具に添えられた11の石盤画が、これらの遊具の使い方のヒントを与える。第三遊具と第四遊具で作られた〈人を取りまく世界〉には、「童謡」がつけられている。これは、子どもは喜んで歌いながら、しかも知的な能力を伸ばすことができるという理論に基づいている。

第三遊具と第五遊具の関係は、第四遊具と第六遊具の関係と同様なものである。つまり、第六遊具は一辺7.5cmの正方形が、実は27個の直方体（レンガ状の形）で構成されている。その内、3個は縦に分割した直方体（家屋の柱に見立てることができる6柱）、6個は横に分割した直方体（〈立方体に切られた庭園の石柱〉に見立てることができる12柱）にさらに分割されている。第六遊具には40の石版画が添えられているが、それらは遊具を用いて多種多様な形を作るヒントを示している。フレーベル自身は、添え書きや石盤を使って、大人が子どもとどのように遊んだら良いかを示してはいないが、その文章や図表からは大人自身もこれら遊具を使って遊び、そのことによってその遊具の構造や遊び、さらには、教育への可能性がわかるヒントを示している。このように、出来るだけ遊具の全体像が分かるようにして、しかも大人も自分で新しい遊ぶ方を考案出来るようにしようとするフレーベルの意図が見て取れる。これらの点から、M.ロックシュタイン女史は、「フレーベルの遊具を使った遊びは、基本的な構造は定まっていますが、創意工夫の余地の大きい、自由度の高いものであった。」（M.Rockstein:Kindergarten,2004,s.39）とフレーベル遊具のもつその自由さを評価している。明治9年、わが国の幼稚園発足以来、そこでは、フレーベル遊具のもつその形式主義、厳格主義（フレーベルの指示通りに遊具を使うという）が強固で、それに対して特に、大正期以降には、倉橋惣三に代表されるように、「フレーベル（主義）批判」という風潮が強まったが、最近のフレーベルの遺稿研究からは、ほぼ、上記M.ロックシュタイン女史のような解釈が主流となっている。

b. 平面状の遊具

平面素材については、第四遊具および第六遊具の直方体を説明する際、すでに説明した。平面遊具には、木製の板がある。正方形を対角線に沿って分割すると、直角二等辺三角形ができる。フレーベルの時代には、木製の板は、赤や黄色、緑に塗られていたが、後に、様々な色と形の板ができるようになった。つまり、長方形、直角三角形、三辺が異なる三角形、鈍角をもつ三角形、ひし形、円状・半円状・中心角90度の扇形上の板を組み合わせることによって〈人を取りまく世界〉・〈美しさを感じさせる基本形〉・〈世界を構成する基本図形〉を多種多様に組み立てることが可能と成る。

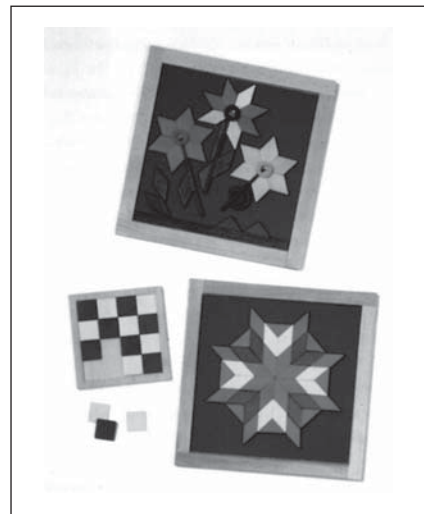


図3 平面状の生活と美しさの形式

折り紙や切り絵の技法もまた、平面状の遊具の一種と考えられる。この遊具も正方形から始まる。これは、フレーベルが特に「四分分割のもの」と呼んでいるものである。紙を折っていくと、平面の形や立方体的な形が現れてくる。正確にずれることなく折るためには、大人の手助けが必要になる。折り紙の大きさは一辺を10cmより小さくしなくてはならない。一度でも折り紙を折りさえすれば、新しい形が現れる。そして折っていくうちに幾何学的な形が次々とできる。同時に、折り紙は小さくなっていく。このようにして出来上がった幾何学模様を、子どもが知っているものになぞらえて、名前をつけてみる。たとえば、三角形を「スカーフ」と、子どもに言わせる。フレーベルは〈人を取りまく世界〉・〈美しさを感じさせる基本

形>・<世界を構成する基本図形>をつくるために、単純な形を基本とするよう推奨している。晩年の1850年、フレーベルは「折り紙の手引き書」と題した論文を『週刊誌（Wochenschrift）』（W.ランゲ編）発表した。その論文で、折り紙遊びは、幾何学的な形を作り出すことから、教育上極めて大きな意味があると述べている。その後、フレーベルの優れた弟子たち、例えば、E.ヘールヴァルト（E.Heerwart, 1834-1911）、A.ケーラー（August Kohler）、A.ポルトガル（Adel von Portugal）、さらには、多くの幼稚園教師達によって、新たな折り方が考案された。多種多様な形の折り紙は、創造性を育む教材となったのである。

フレーベルは切り紙の具体的な方法を詳しく書き残してはいないが、切り抜きの順序についておおまかな要点を記している。それによると、正方形の紙は三重に折り畳み、直角三角形をつくる。この直角三角形はその紙が左右対称であることはもちろんであるが、その上で、切り離しや切り抜きのために下書き（水平線、垂直線、対角線、また鈍角や円）が描かれる。紙は切り取った後、真ん中から広げて、左右対称に貼付ける。この作業によって、本物の万華鏡が現れる。このような遊びの眼目は、指先の器用さを養うことと並んで、対称の形に気づく能力を引き出し、創造性を育むことである。幾何学的な形の切り抜き遊びに習熟した後で、様々な物の形に似せて自由に切り抜く遊びへ進むよう子どもたちを促せば、より一層の能力を伸ばすことになる。

c. 直線の遊具

まっすぐな線を使った遊びには、細い木製の棒や紙テープ、薄い木の板を交差させたもの、直線を描くことなどがあげられる。細い木製の棒は、確かに目立たない遊具であるが、実は想像以上に多くの使い道がある遊具だ。木製の棒は、日常場面を表現するにあたって様々な使うことができる。「お話をしながらの棒遊びは、大変有意義で、（略）とにかく、子どもが今作っているものについて、言葉で表現できるようにするとよい」と、R. ロックシュタイン女史は述べている。2.5cmから10cmまで、様々な長さの細い棒を使うと、子どもたちは広がりや長さの感覚がすぐわかるようになるという。

フレーベルの死後、彼の後妻ルイーゼ・レヴィン（Luise Levin, 1815-1900）が金属で作った直径2.5cmならびに4cmの輪と半円を作成させ、手引書も付けて世に送った。すでに、フレーベルは1852年、「Fr.フレーベルの努力のための雑誌（Zeitschrift für Fröbels Bestrebungen）」において、金属の輪での遊びに関する草稿を発表している。また、1852年発行されたヨハニス・シュタンゲンベルガー（J.Stangenbergaer）の小冊子『木の棒で遊ぼう—就学前の子どものための棒遊び入門』に、フレーベルは序文を寄せているのである。フレーベルは棒を使つての線画を特に重視した。フレーベルの論文「子どもが線画をする楽しみ」において、彼は、子どもたちの母が思い描いたり、形作りをしようとする子どもの意欲をのばすように配慮することが大切である、とのべている。フレーベルは世の母親に「子どもにまず棒を一本用意してください。そして地面や砂に円や線を描貸せてみてください」と言っている。「大人が詩や歌を口ずさむ、あるいはお手本をみせることと平行して、大人が子どもに寄り添うことが大切なのです。そうすることこそが子どもがより自覚的に遊具を使うようになるコツです」とフレーベルは考えている。

子どもが絵を描く能力をのばすために、フレーベルは方眼の下敷きを制作した。この方眼の下敷きを使って、垂直線や水平線、斜線や曲線を念頭におきながら、子どもは嬉々として自然界や身の回りの対象物の長さを計れるようになり、またいきいきとした絵を描けるようになる、という。また、描いた形に色をつけることによって、子どもの美意識はさらに充実したものになる、という。これこそが、まさに、「自己創造的な活動」といえよう。

紙テープの編み方について、フレーベルは何の文章も執筆しなかった。ただ、いくつかの手本を残している。紙テープを作ったらそれを縦横に重ね合わせる等。フレーベルの弟子のE.ヘールヴァルトが年少の子どもを念頭に推奨していたのは、1cm幅のテープと木製の棒である。紙テープを編む、という遊びで、フレーベルの残したお手本の基本にあるのは数の操作であった。「ひとつひとつを重ね合わせる」ことから始まって、次第に難しい数の組み合わせへと進んで行く。お手本

を「まねる」ことから「自由に編む」段階にまで至ること、この行程が重要なのである（最初から「自由に編む」のではない）。更に、フレーベルは、かんなくずを用いて、それを組んだり編んだりして簡単な幾何学模様をつくることも試みている。これら紙テープ遊びによって、目測する力や手の筋力、感受性、思考力を伸ばすことができる、とフレーベルは考えたのである。

紙テープの網み掛け遊びも、まっすぐな方の遊具・作業具のひとつである。この遊びは、フレーベルの愛弟子のひとり幼稚園教員M.シェルホルン（Schellhorun）によって工夫された。シェルホルンは、この手遊びの「技」をさらに発展させた。この紙テープ遊びは、とくに、幾何学模様（知的側面）とシンメトリー（美的側面）を表すことに最も適してと考えられる。

d. 点の遊具

立体を切ると断面は平面になり、この平面をさらに切ると線になる。そして線をさらに切ると点になる。このように遊びのなかで進行する最後の遊びの形が点である。点を用いた遊びは、針で穴をあけて形を描くことである。この遊びのためには、フェルトや針、またはフェルトのかわりに厚紙を用意する。最初は縦や横に穴をあける。子どもがそれをできるようになれば、斜めや丸状に穴をあける。これらを駆使して動物や花といった命あるものを表現する。子どもの発達の程度に応じて、自由に描かせてもよい。また、お手本をなぞらせてもよい。

粘土や砂で形をつくることもそれまでの遊びを総合する最終段階のものである。フレーベルによれば、子どもはひたすら球体をつくる。それから立方体のようなもの、または具体的に、リングを作り、水と砂を混ぜてケーキを作る。

フレーベルは、彼の考案した教育遊具（恩物）並びに作業具を用いた遊びを通じて、子どものもつあらゆる力や素質を伸ばし、あらゆる感覚を発達させると言う目標を追求した。フレーベルが考案したこれら「単純で・美的で・全体を見渡せる遊具——それは全体性と体系性と同時に世界の姿を代表的に提示した諸素材であるが——こそ、子ども自身を活気づけ、子ども自身で小さな世界を作り出そうとするものなのです。」

（M.Rockstein,s.49）。遊びこそ、子どもの「内面（心）を目覚めさせる手段」であり、同時に、「外の世界（社会）への鍵」なのである（ditto,s.51）。

まとめ

以上の考察から明らかなように、「子ども・子育て支援研究センター」で、フレーベル教育遊具を使用する場合には、子どもの発達段階を考慮して教育遊具の体系の内（末尾 図1：「フレーベル教育遊具の体系」）を参照のこと、

1. 遊戯手段として、1) 立体としては、幼稚園（キンダーガールテン）の遊具、すなわち、第3恩物、第4恩物、第5恩物、第6恩物、並びに、媒介学校の遊具、すなわち、拡張第2遊具（14の立体）、第2系列遊具（話す立方体）、2) 平面としては、厚紙の張り板、色付き正方形の折り紙、c) 直線としては、木片、木の棒、紙の紐と紙片、糸、d) 点としては、石、真珠（ビーズ）、種子と果実そして砂などが考えられる。
2. 遊戯手段を用いて遊ばせる過程には、おのおの「分析過程」と「総合過程」があり、両過程を統一させることが、「遊び」を指導する側に求められる。
3. フレーベル遊具の使用は、一人ひとりの子どもの自己活動を促すことが基本であるので、「一斉教授」の形式ではなく、一人ひとりの子ども自身の興味・関心に基づいて、個別活動を中心におこなうことが大切である。
4. フレーベルの教育的遊具体系のI家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』は、フレーベルの意図では、家庭における「親と子（乳幼児）」が共に身体的接触を通じて、活用するものであるが、支援研究センターでの利用はなかなか困難と考えられる。ただ、フレーベルの意図した精神、すなわち、身体的活動、接触、あるいは母子が一緒に歌う、読む等の行為によって、子どもの自己活動を豊かにするという精神は、運動手段である「恩物」の活用においても保持されなければならない。
5. 提案：今回論究はされなかったが、図1の「フレーベルの教育遊戯の体系」中、時計文字Ⅲの「運動遊戯」は、子どもの社会性（子どもと子ども、子どもと保育者の関係等）

を培う意味でも、ぜひ、その機会を設け実践すべきである。晩年、フレーベルは「子どもの自己活動を促すものとしての運動遊戯」を、協力者のH.ランゲタル（Heinrich Langenthal,1792-1879）共々、強調している。

Blankenburg.

（本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）、平成21年度－23年度）による、「未刊行資料の解読によるフレーベル「教具」の体系的な研究」の研究成果の一部である。）

参考・引用文献（本『子ども・子育て支援研究センター年報』では執筆要項において注及び引用・参考文献の形式が規定されているが、本稿はすでに、規定の分量を超えているので、簡略化して、一括して記載する。）

1. 小笠原道雄(1994)『フレーベルとその時代』、玉川大学出版部。
2. 小笠原道雄(2000)『フレーベル』、清水書院。
3. Ed.シュプランガー・小笠原／鳥光共訳(1983)『フレーベルの思想界より』、玉川大学出版部。
4. H.ハイラント・小笠原／藤川共訳(1991)『フレーベル入門』、玉川大学出版部。
5. R・ボルト／W・アイヒラー・小笠原道雄訳(2006)『フレーベル、生涯と活動』、玉川大学出版部。
6. 小笠原道雄論(2009)「新しい資料の解読によるフレーベル「教育遊具」の体系的考察－資料批判と今日的課題－」、広島文化短期大学『紀要』、第42号、1－10頁。
7. 小笠原道雄論(2008)「未刊行資料の解読によるフレーベルの家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』の成立に関する考察」、広島文化短期大学『紀要』、第41号、1－12頁。
8. 小笠原道雄論(1999)「さあ、私たちの子どもに生きようではないか!」、所収：寺崎昌男編『教育名言辞典』、東京書籍、523－525頁。
9. 小笠原道雄論(1999)「遊びこそは人を強化する秀れた精神的沐浴であったと、今でもわたしはそれを強く感じるのです。」、所収：寺崎昌男編『教育名言辞典』、東京書籍、232－233頁。
10. Helmut Heiland(1998); Die Spielpädagogik Friedrich Fröbels, Georg Olms Verlag.
11. Margitta Rockstein(2004); Kindergarten, Bad

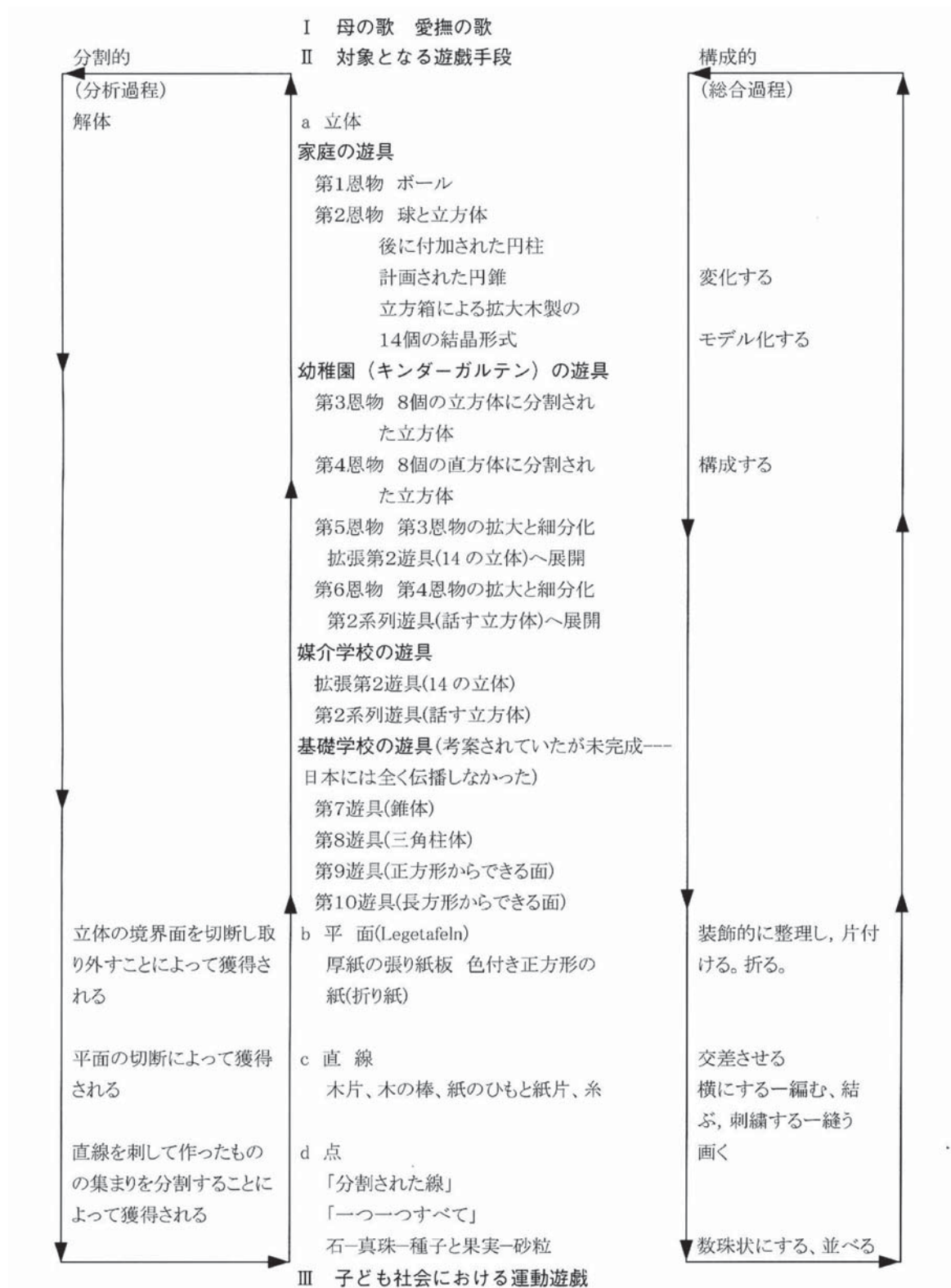


図1 フレーベルの発達の・教育的遊具（恩物）の体系